

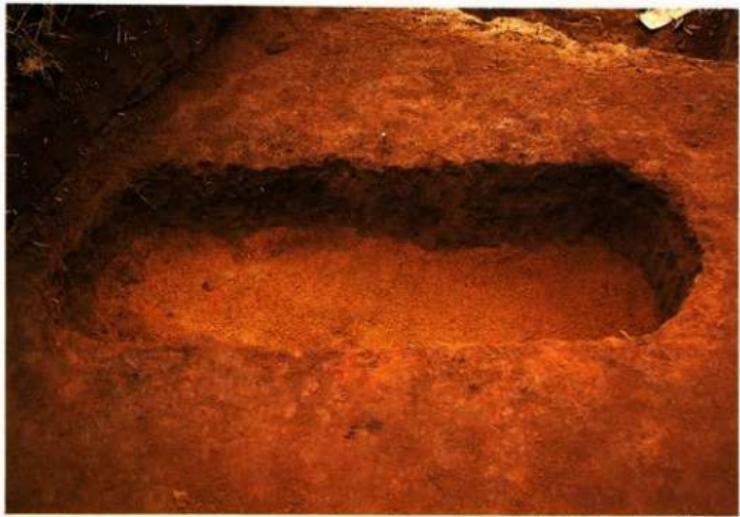
は
八
重
地
区
遺
跡

県営農地保全整備事業八重地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要



1989

たの
宮崎県宮崎郡田野町教育委員会



S K 100 御池ボラ検出状況

序

このたび、田野町教育委員会では昭和63年度、田野町八重地区県営農地保全整備事業に伴う八重地区遺跡の発掘調査概要報告書を刊行することになりました。

八重地区遺跡は、七野遺跡・丸野遺跡・長戸遺跡などの位置する台地のさらに北側奥にあります。調査の結果、縄文時代早期の住居跡・集石遺構、前期の土坑、弥生時代後期の住居跡をはじめとして、同時代の土器・石器が出土し、町の歴史の空白部分をまた一つ埋めることができました。

今後、本報告書が文化財の保護と郷土史研究の資料として、広く活用されることを願っております。

刊行にあたり、発掘調査に参加していただいた地元の方々や、御理解と御協力を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

平成元年3月31日

田野町教育委員会

教育長 種子田 栄 幸

例　　言

1. 本書は、田野町八重地区の県営農地保全整備事業に伴い、昭和63年度に実施した八重地区遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 調査組織は次の通りである。

調査主体 　田野町教育委員会

教　育　長 種子田 栄 幸

社会教育課長 川 口 昭 七

補佐兼

社会教育係長 新 坂 政 光

社会教育係

主任 主事 後 藤 哲 男 (調査事務担当)

主 事 補 森 田 浩 史 (調査員)

調査指導 奈良大学文学部教授 水 野 正 好

宮崎県教育庁 文化課

3. 本書に掲載した挿図は、遺構整図・遺物拓本の大半を室内作業員が行い、森田がこれを補足、修正した。
4. 本書の図版は、遺構写真・遺物写真ともに森田が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は、主に森田が行った。
6. 本書に用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。
7. 本書に用いた記号は、S Bが住居跡、S Kが土坑、S Iが配石・集石遺構を表わす。
8. 出土遺物は田野町教育委員会が保管している。

本文目次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 歴史的環	1
II 調査の結果	
1. 調査区の設定	5
2. 検出遺構	5
3. 検出遺物	10
III まとめ	11

挿図目次

第1図 八重地区遺跡及び周辺遺跡分布図	3
第2図 調査区周辺地形図	4
第3図 遺構実測図SB 45	7
第4図 A・E地区遺構配置図	7
第5図 B～D地区遺構配置図	8
第6図 出土遺物実測図・拓影	10

図版目次

図版1 A地区遺構検出状況・B地区西側遺構検出状況
図版2 B地区東側遺構検出状況・SB 42(西側から)
図版3 D地区遺構検出状況・SB 74、SK 75(北側から)
図版4 E地区遺構検出状況・SI 94検出状況
図版5 B地区・D地区出土遺物
図版6 E地区出土遺物

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

宮崎県宮崎郡田野町では、近年各地区において行われている農地保全整備事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。今年度は県営特殊農地保全整備事業に伴う調査として、七野地区と八重地区の調査を実施した。ここで報告する八重地区については、昭和63年1月に県文化課が事業区内を踏査し、埋蔵文化財の分布を確認した。その結果に基づき同年1月7日に地元との協議がもたれ、以後も県中部農林振興局と遺跡の保護について協議を続けた結果、事業施工上、保存が困難な場所について、記録保存のための発掘調査を実施するに至った。

昭和63年7月に協議を終え、同年8月29日から発掘調査を開始し、平成元年3月25日までに測量等を含めた現地の作業を終了した。

同事業区内においては、平成元年度も継続して調査を実施する予定である。

第2節 歴史的環境

町内には多くの遺跡の分布が知られているが、近年の開発等に伴い年々その数は増加の傾向にある。まずこれら周知の遺跡を概観しながら、当地の歴史的環境について述べていくこととする。

旧石器時代は、ナイフ形石器が表採された荻ヶ瀬遺跡をはじめ、昭和58年から59年にかけて発掘調査の行われた前平地区の芳ヶ迫第1遺跡・第3遺跡、札ノ元遺跡などがある。芳ヶ迫第1遺跡では、ナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・彫器・搔器、第3遺跡では、石核・剥片尖頭器、札ノ元遺跡では、石核・ナイフ形石器などが出土⁽¹⁾している。これらの遺跡からはいずれも集石造構が検出されている。また、今年度調査を実施した七野地区の長蔵遺跡においても包含層が確認され、石核・剥片などが出土⁽²⁾している。
⁽³⁾

縄文時代は町内で最も遺跡数の多い時代である。早期は前畠遺跡をはじめ、既に調査された遺跡として前述した前平地区的遺跡群をはじめ、昭和61年度から62年度にかけて調査された丸野第2遺跡が報告済である。特に前平地区的札ノ元遺跡、又五郎遺跡においては当時県下初の例として竪穴住居跡が検出されている。前期は丸野第2遺

(7) 跡E地区の他、今年度の調査においても長蔵遺跡⁽⁸⁾、八重地区遺跡から出土している。中期の資料は丸野第2遺跡で出土した回線文土器のみである。後期は丸野第1遺跡、⁽⁹⁾黒草遺跡⁽¹⁰⁾の他、指宿式・綾式・下弓田式（市来式）土器などが出土した青木遺跡⁽¹¹⁾がある。晩期は丸野第1遺跡、晩期前半の土器が出土した芳ヶ迫第1遺跡・第3遺跡がある。

弥生時代は丸野第2遺跡E地区で中期の土器が、同A地区で後期前半の竪穴住居跡⁽¹²⁾が検出された他、八重地区遺跡B地区からも後期初頭の竪穴住居跡が検出されている。また黒草遺跡では終末期の土器が確認されている。

古墳時代は灰ヶ野と高野原で地下式横穴墓が確認されているが、遺物散布地などは明確にされていない。

古代においては、船ヶ山地区の合子ヶ谷遺跡で平安時代の布目痕土器が表採されている。また当町は宮崎平野から清武を経て都城盆地、大隅へ至る、交通の要衝の地であったと考えられており、延喜式の日向16駅のひとつである「救式駅」の所在を町内に想定する説もある。

中世から近世にかけては、田野城址を中心として山城や社寺などがあるが、歴史的背景などを考えるとまだまだ未解明の時代である。芳ヶ迫第2遺跡では、備前焼の甕⁽¹³⁾や東播系片口鉢などの中世陶器、青磁片が出土している。

以上のように、縄文時代の遺跡については調査例もあり遺跡数の大半を占めるが、特に古墳時代以降になると空白部分が多い。これは当町が縄文時代の生活に適した環境下にあったことを示してはいるものの、地下式横穴墓の存在、「救式駅」の可能性などを考えると、今後各時代の遺跡の発見例が、かなり増加するものと思われる。

註 (1) 宮崎県教育委員会「九州縦貫自動車道(宮崎線)関係遺跡分布調査報告書」1968

(2) H田野町教育委員会「芳ヶ迫第1・第2・第3遺跡」「田野町文化財調査報告書」第3集 1986

(3) 田野町教育委員会「長蔵遺跡」「田野町文化財調査報告書」第6集 1989

(4) 茂山 譲「宮崎郡田野町表採の貝殻条痕文土器」「宮崎考古」第4号 1978

(5) H田野町教育委員会「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第4集 1987

田野町教育委員会「丸野第2遺跡・2次調査」「田野町文化財調査報告書」第5集 1988

(6) (2)に同じ

(7) H田野町教育委員会「丸野第2遺跡・2次調査」「田野町文化財調査報告書」第5集 1988

(8) (3)に同じ

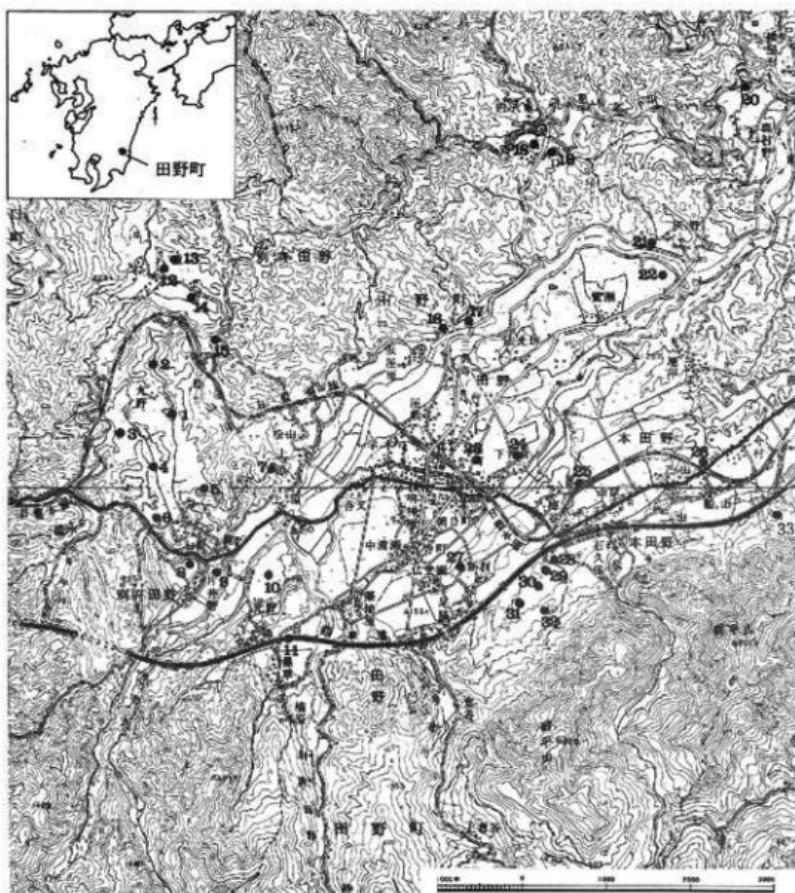
(9) (7)に同じ

(10) 宮崎県教育委員会「黒草遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」(3) 1979

(11) 鈴木重治「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」「日本考古学協会第28回大会研究発表要旨」1963

(12) 田野町教育委員会「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第4集 1987

(13) (2)に同じ



第1図 八重地区遺跡及び周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 丸野第2遺跡 | 9. ヒダカン城址 | 17. 萩ヶ瀬遺跡 | 25. 梅谷城址 |
| 2. 丸野第1遺跡 | 10. 高野原地下式横穴墓 | 18. 堀口A遺跡 | 26. 船ヶ山遺跡 |
| 3. 長蔵遺跡 | 11. 黒草遺跡 | 19. 堀口B遺跡 | 27. 青木遺跡 |
| 4. 七野第1遺跡 | 12. 八重B遺跡 | 20. ズクノ山遺跡 | 28. 又五郎遺跡 |
| 5. 七野第2遺跡 | 13. 八重C遺跡 | 21. 灰ヶ野地下式横穴墓 | 29. 札ノ元遺跡 |
| 6. 七野第3遺跡 | 14. 八重A遺跡 | 22. 灰ヶ野遺跡 | 30. 芳ヶ迫第1遺跡 |
| 7. 天建神社址 | 15. 前細遺跡 | 23. 桜町遺跡 | 31. 芳ヶ迫第3遺跡 |
| 8. 片井野遺跡 | 16. 田野城址 | 24. 井倉洞穴遺跡 | 32. 芳ヶ迫第2遺跡 |
| | | | 33. 合子ヶ谷遺跡 |



第2図 調査区周辺地形図

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査区の設定

当遺跡は八重地区のいくつもの丘陵からなる、台地上に位置する。調査区は、その位置関係や土層観察の都合上から、AからGの7地区を設定した。これらのうち、F・G地区については、遺構・遺物ともに残存しないことを確認したので、ここでは報告しない。また、C地区についても遺構が確認されなかったが、B地区とD地区との中間に接してあるため、検討すべきところとしてとりあげておく。

第2節 検出遺構

A地区の遺構検出は、約1,600m²について行った。遺構は土坑やピットなどが総数39基検出された。大半のものは遺物の出土がなく、時期の決定は困難であるが、SK08の埋土に御池ボラが見られたので、縄文時代前期の遺構も存在したと考えられる。SK08を含めてSK04・05・13などは、土坑墓であった可能性も考えなければならない。

B地区の遺構検出は、約620m²について行った。基本層位は上層より、耕土・黒色土層・赤ホヤ層・黒褐色硬質ローム層・褐色ローム層から成る。赤ホヤ層上面及び黒褐色硬質ローム層上面において検出を行い。竪穴住居跡・土坑・ピットなどを確認した。SK49は不整形な円形を呈しており、曾畠系の土器が出土していることから縄文時代前期の埋没が考えられる。SK53は、SB52を掘込み面まで精査した段階で検出した。ボラが埋土に見られ、曾畠系の土器が出土しており、縄文時代前期の埋没が考えられる。竪穴住居跡は3棟検出された。SB45は長方形のプランを呈す。出土した土器から、弥生時代後期初頭の埋没が考えられる。SB52もまとまった出土遺物はなかったものの、そのプランや位置関係などから、ほぼ同時期と想定される。SB42はいちじるしくカク乱を受けており、正確なプランも把握できなかったが、主柱穴を確認した。埋没時期は不明である。

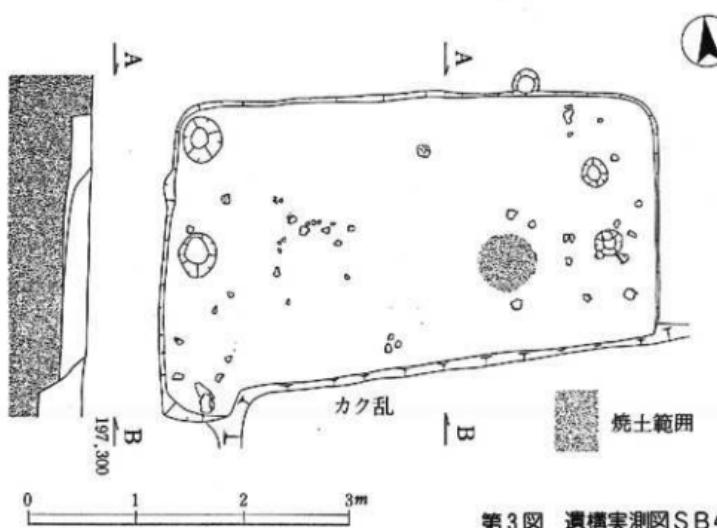
D地区の遺構検出は、約380m²について行った。表土を除去した段階で既に赤ホヤ層は削平されていたため、黒褐色硬質ローム層上面を中心に検出した。遺構は竪穴住居跡・土坑・ピットなどを確認した。土坑は大半が不整形なプランを呈する。SI75からは条痕文土器が出土しており、縄文時代早期の埋没が考えられる。他の土坑については良好な出土遺物はないが、これより新しい時期の遺物は出土しておらず、早

期のものとして捉えておく。SB74は円形のプランを呈し、主柱穴は見られなかったものの、これに伴うものと思われるピットを掘込みの周囲にめぐらす。条痕文土器が出土しており、縄文時代早期の埋没が考えられる。

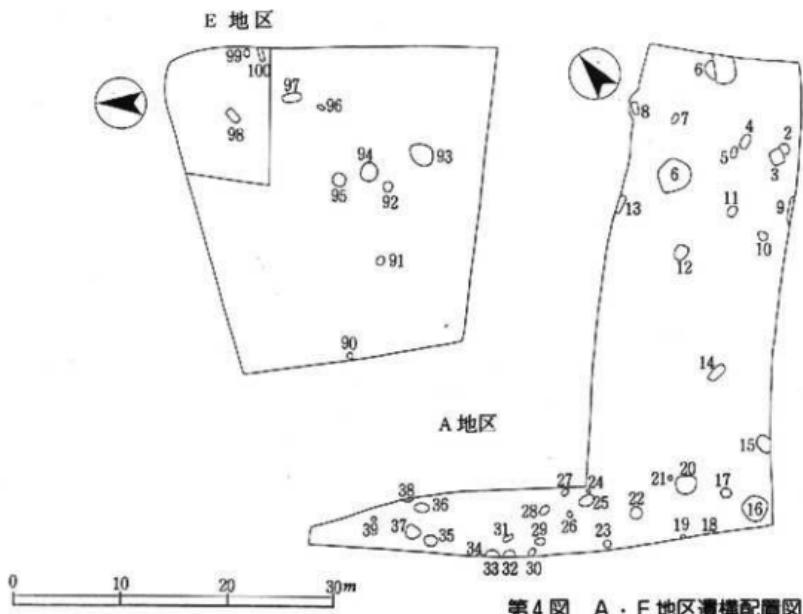
C地区は調査区断面において土坑を1基検出したのみである。これは赤ホヤ層と黒褐色ローム層の一部を既に削平されていたこともあるが、B地区においては縄文時代早期より古い遺構が、D地区においては縄文時代早期よりも新しい遺構が見られない。C地区はその中間にあって、各遺構群のある程度の拡がりを把握しうるものとして捉えておく。

E地区の遺構検出は、約800m²について行った。基本層位は上層から、耕土・二次赤ホヤ層・褐色土層・黒色粘質土層・明黄褐色ロームブロックを含む褐色土層・黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土層から成る。褐色土層上面においては土坑を確認した。SK99・100は長方形のプランを呈し、埋土に御池ボラが見られたので、縄文時代前期の埋没が考えられる。明黄褐色ロームブロックを含む褐色土層上面においては、土坑・集石遺構などを確認した。出土遺物などから、これらは全て縄文時代早期のものと見られる。

以上、各地区的遺構検出状況を概観した。調査地の現況が開墾後の畠地ということもあり、全ての遺構を層位で検出することはできなかった。出土土器の細片や遺構内の埋土などから、更に遺構の時期を検討していくことが、今後の課題である。



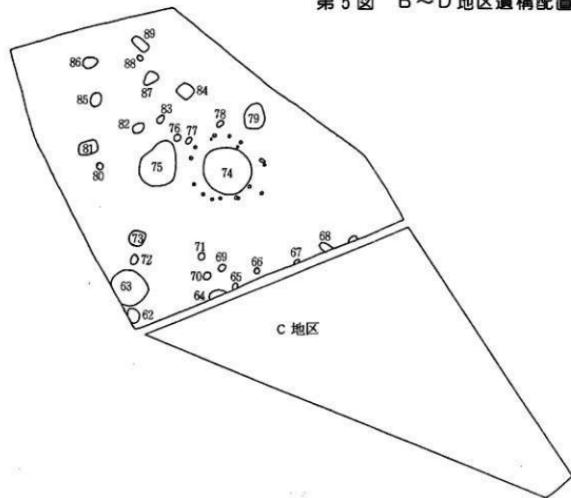
第3図 遺構実測図SB 45



第4図 A・E地区遺構配置図

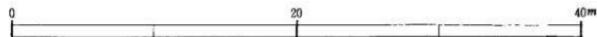
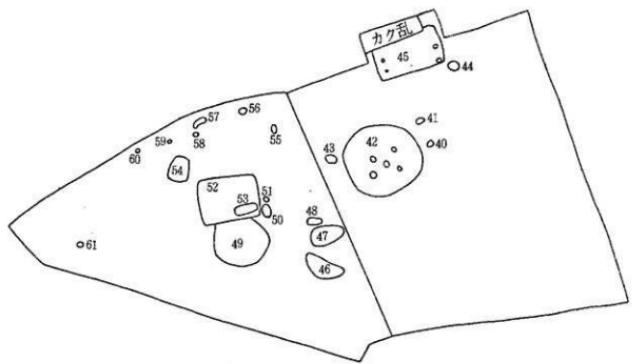
D 地区

第 5 図 B ~ D 地区遺構配置図



C 地区

B 地区



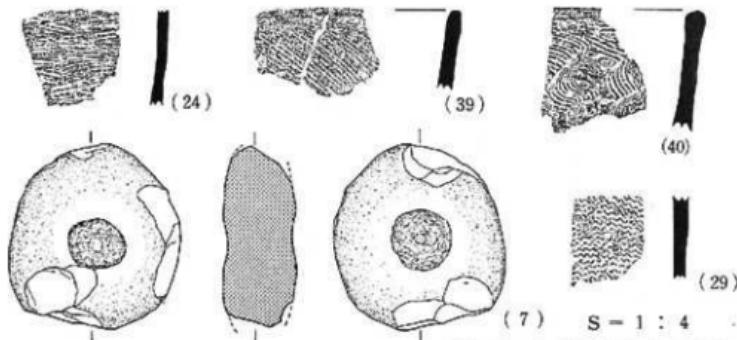
第3節 検出遺物

遺物はA地区から縄文時代早期～前期の土器が、B地区から縄文時代前期と弥生時代後期の土器・石器が、D地区から縄文時代早期の土器・石器が、E地区から縄文時代早期～前期の土器・石器が出土している。縄文時代早期の土器は押型文土器の他、貝殻条痕文、沈線文、撚糸文(40・43)を施すもの、前平式(35)などがある。(20・21)はSB74、(22～24)はSK75、(25)はSI93、(39)はSI94、(42)はSK92からの出土であるが、その他の土器は耕土及び包含層からの出土である。押型文土器は山形文(25～29・31・32)、梢円文(30・33)が見られる。

縄文時代前期の土器は土坑からも数点出土しているが、大半が耕土及び包含層から出土している。(1・2)はSK49から出土したもので、(1)は口縁端部とその外面直下に刺突文、内外面に刺突文・平行沈線文を施す。(34)は二次赤ホヤ層からの出土で、外面に羽状沈線文を施す。(3・5・6)はSB52の埋土に混入して出土したものである。いずれも曾畠系のものと考えられる。

弥生時代の土器はB地区的住居跡及び耕土・包含層から出土した。(4・8～12)はいずれもSB45から出土したものである。(8・10)は壺(11・12)は甌で、(8 11)はそれぞれ刻目突帯文を施す。(4)は高杯(9)は鉢である。壺・甌の形態から、これらは弥生時代も後期初頭のものと考えられる。

その他石器は石鎌(17・18・37・38)石匙(14)凹み石(7)の他、剥片が多数出土した。(19)はSK85から出土したが用途不明である。(14～17・37・38)は耕土及び包含層から、(18)はSK75から出土した。



第6図 出土物実測図・拓影

第Ⅲ章 まとめ

八重地区遺跡の調査は、A・B・C・D・E・F・Gの、5地区を設定して実施した。このうちF・G地区については、遺構及び遺物包含層を確認するに至らなかった。また、C地区についてはA地区とB地区の間にありながら、遺構は検出されなかった。

A地区的遺構は土坑のみ確認した。時期については遺構に伴う遺物の出土が無く確定できないが、長方形の土坑内に御池ボラの埋土がみられたので、長蔵遺跡の例から縄文時代前期を中心とする一群である可能性をあげておく。

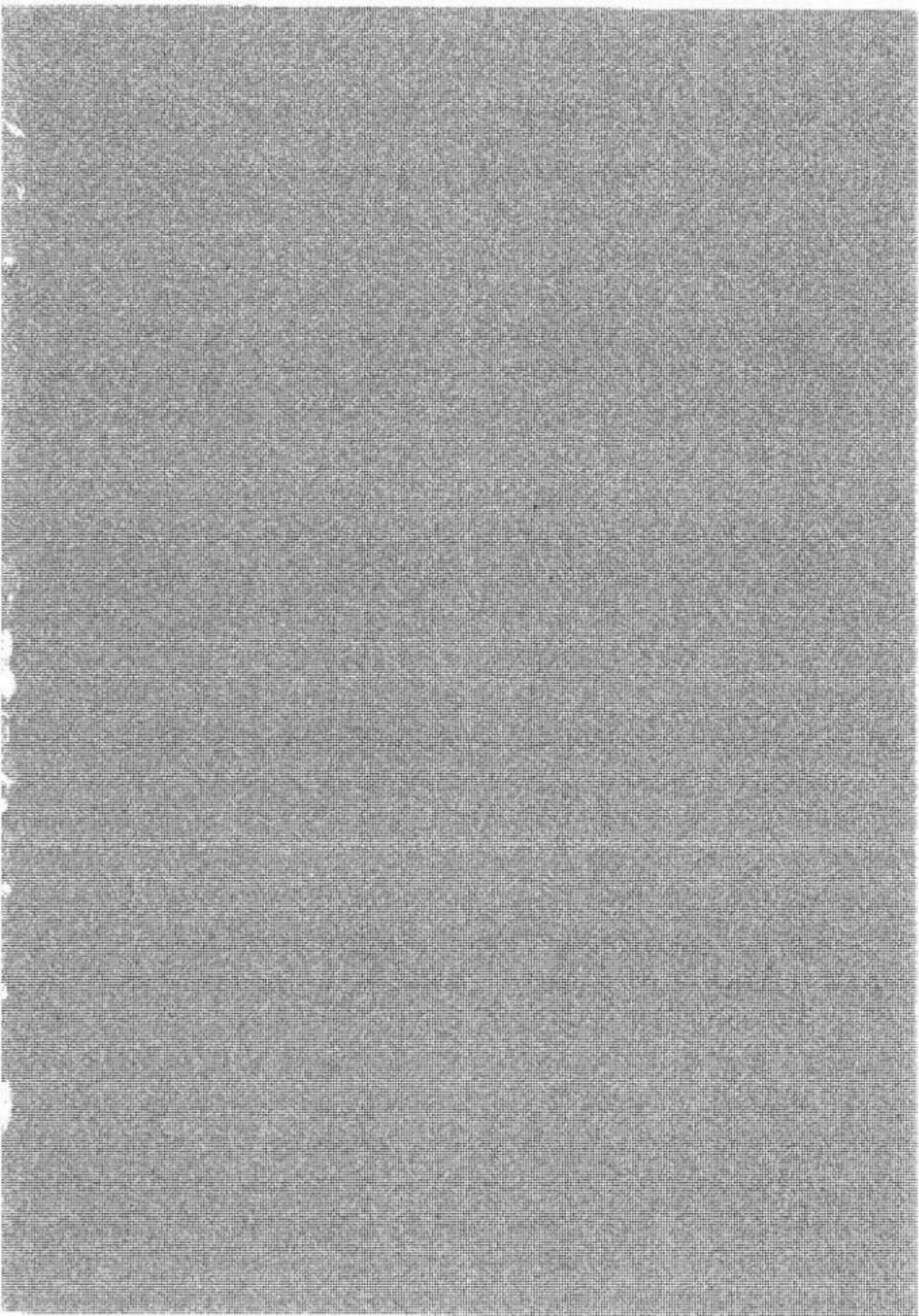
B地区的遺構は、縄文時代前期の土坑と弥生時代後期の住居跡2棟の他、時期不明の土坑・住居跡を検出した。縄文時代前期の土坑はボラを埋土とする長方形のもの他、やや不整形な円形を呈するものがあった。遺物は口縁部から棒状工具による刺突文と沈線文などで模様を構成する、曾畠系の土器が出土した。弥生時代後期の住居跡は長方形のプランを呈するもので、主柱穴等は見られなかった。遺物は頸部に刻目の突帯文を施すカメの他、鉢などが出土した。弥生時代後期でも初頭のものである。

D地区的遺構は、褐色硬質ローム層上面において縄文時代早期の住居跡・土坑が検出された。住居跡のプランは円形で、主柱穴は明確ではないが、堀込みの外周にピットをめぐらす。遺物は条痕文土器が少量ながら出土した。

E地区的遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑、前期の土坑が検出された。前期の土坑のうち1基はボラを埋土としている。早期の遺物は押型文・条痕文・撫糸文土器などが、前期の遺物は曾畠系の土器が出土した。

以上のように、八重地区遺跡は縄文時代早期から前期、弥生時代後期の遺跡であることがわかったが、A地区とB・C・D地区、E地区は互いに離れた位置にあり、実際には3つの遺跡として捉えるべきかもしれない。これらについては、出土遺物の細かな編年を含めて、本報告書作成の段階でまとめていきたいと思う。

写 真 図 版



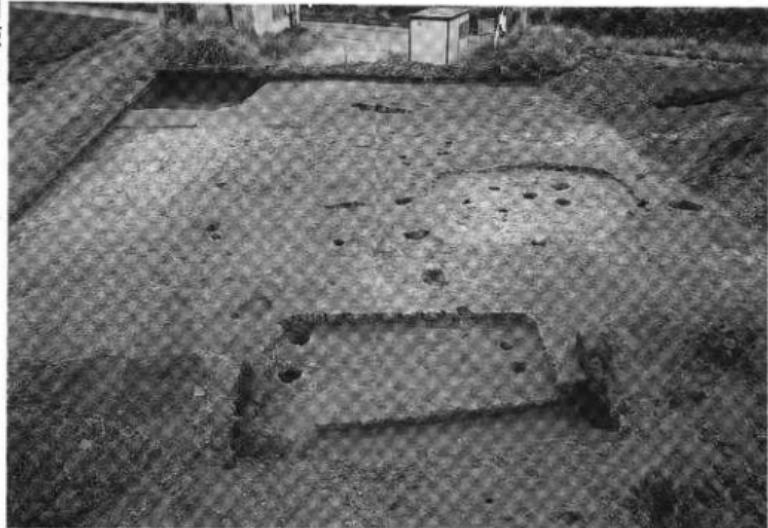


A 地区遺構検出状況

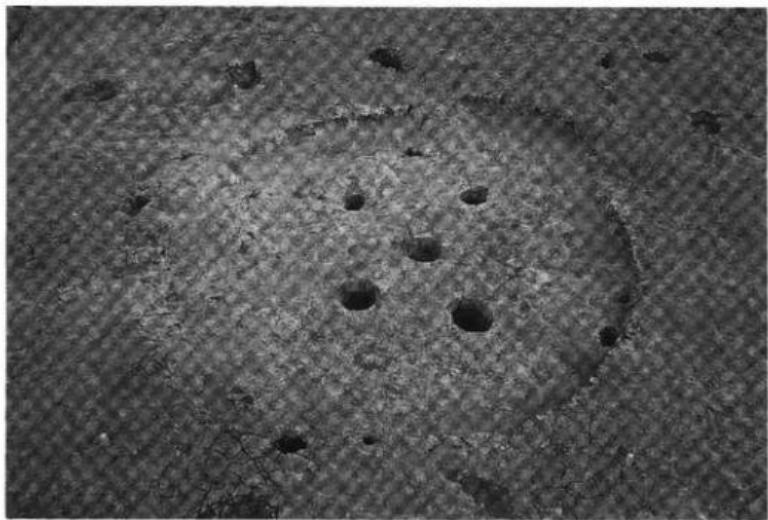


B 地区西侧遺構検出状況

図版
2



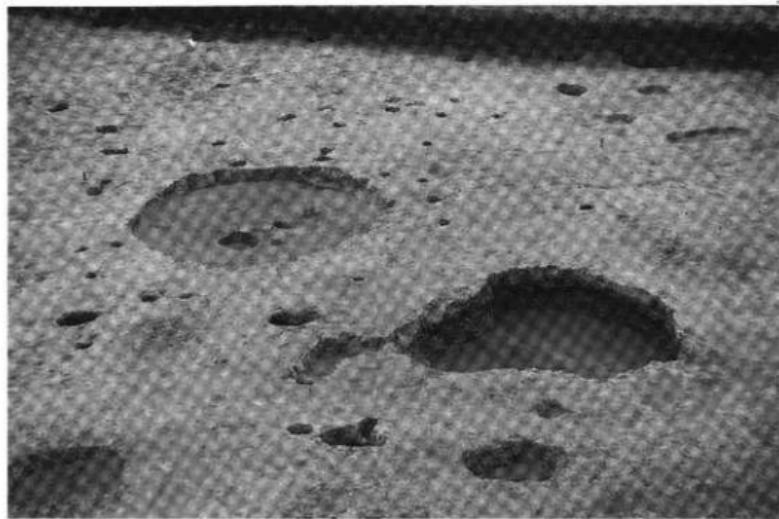
B 地区東側遺構検出状況



S B 42 (西側から)



D 地区遺構検出状況



S B74・SK75 (北側から)

図
版
4

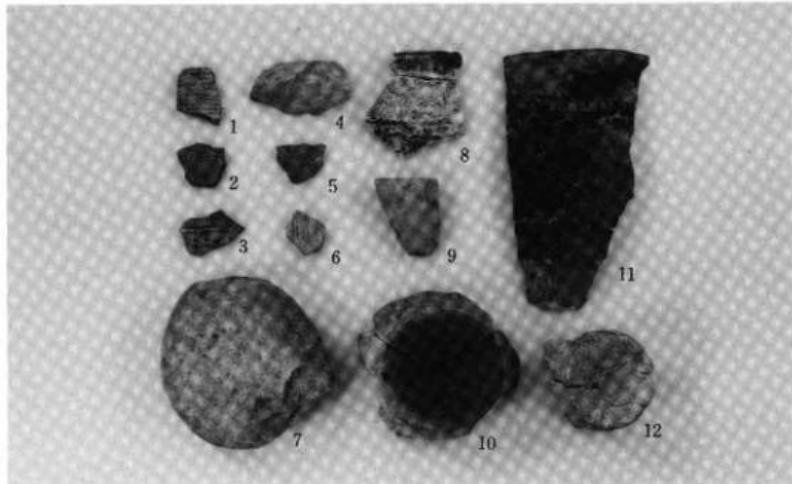


E 地区遺構検出状況

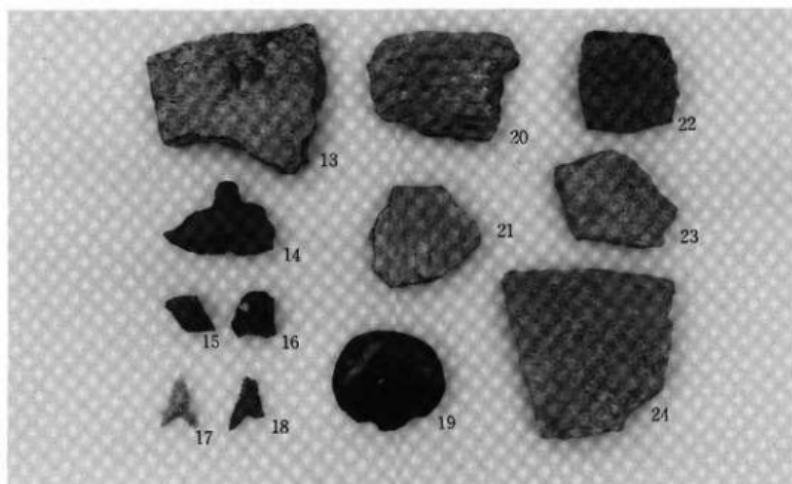


S I - 94検出状況

図版
5

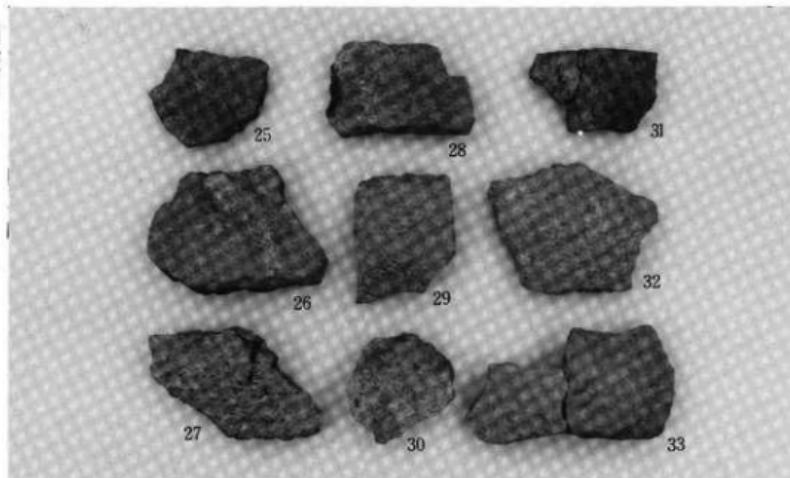


B 地区出土遺物

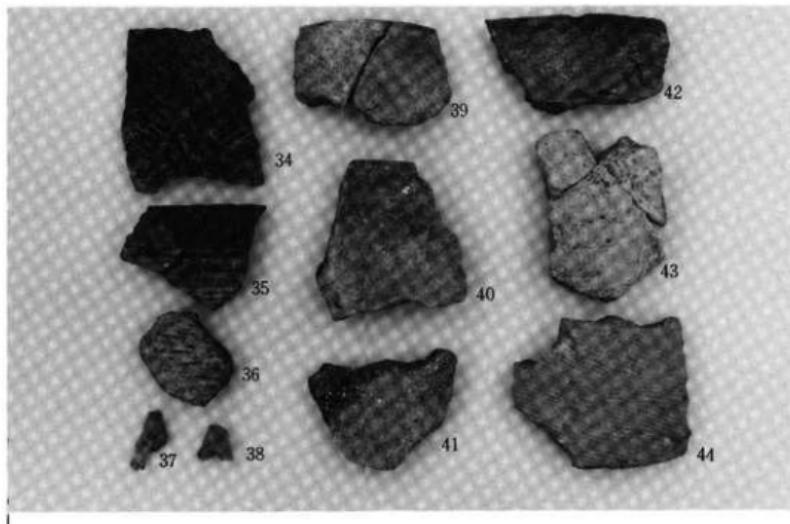


D 地区出土遺物

圖版
6



E 地區出土遺物



E 地區出土遺物

No. 20

C307八重地区遺跡

宮崎大学 2009年11月

田野町文化財調査報告書 第7集

八重地区遺跡

発行年月 1989年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 (有)ダイコー印刷